春の夢

一問一答

宮本輝氏に「春の夢」にまつわる背景やエピソードなど、ミュージアムからの質問にお答えいただきました。

■「春の夢」という作品について、思い出をお聞かせください。

書き始めてからずっと、これは失敗作だと思っていました。書き終えて読み直したとき、これはこれでちゃんと書けていると安堵しました。そういう思い出があります。

■「棲息」から「春の夢」に、題を変えたくなったのはいつ頃ですか？

連載を始めてからすぐです。

■「春の夢」のお気に入りのシーンがあればお聞かせください。

最後の2、3枚です。※季節が巡って再び春が訪れ、哲之が新しい一歩を踏み出すシーンです。

■哲之と母、そして自分が一緒に暮らすための
アパートを借りる契約をすでにしてしまったと
泣きじゃくりながら陽子が明かす場面は
とてもすてきだと思いました。
こんな感動をあたえてくれるすばらしい恋人に
出会われたのでしょうか？

はい。そういう人と出会いました。

■「青が散る」のヒロイン夏子と「春の夢」の恋人陽子、
二人のモデルはいたのですか？
夏子と陽子、宮本さんはどちらがお好きですか？

夏子にモデルはいません。若いころは陽子が好きでした。今は夏子のような女性と食事でもしたいな、と。でも、私にはちょっと若すぎますね。むひ。

■恋人を誰かと取り合ったご経験は
ありますか？

あったような、なかったような…。遠い昔のことですので。

■「春の夢」（「棲息」）は、
結核の療養のための休筆期間後、
「錦繍」の書き下ろし雑誌掲載の翌月（1982年1月号）
から、「流転の海」と同時に連載を開始されています。
これら3作品の執筆を開始されたのはいつ頃からですか？

34才後半のころではないかと思います。正確な時期は忘れました。

■「青が散る」の連載再開、そして「星々の悲しみ」を発表された
後に「春の夢」を執筆されています。
これら2作品のあとに「春の夢」を執筆されたことには、
どのような背景があったのでしょうか？

さまざまな「青春」というものを書きたかったんです。そして、それは今しか書けないという気がしたのです。

■哲之が青春を過ごした1970年代は
どのような時代であったと思われますか？

70年代といえば、全共闘というふうに思われていますが、このころの青年で大学に進学できたのは、わずか20％程度のはずです。あとの80％の多くは集団就職で都会へ出て来た少年が大きくなったのです。高度経済成長を支えたのは、この集団就職で中学卒業後、ふるさとをあとにした少年少女たちでした。そのことを忘れてはならないと思っています。

■「春の夢」展に何かコメントをいただけますでしょうか？

私のミュージアムのために、絶えず新しい企画を考えて下さって感謝しています。この「春の夢」展によって、初めて「春の夢」という作品を読んで下さる方々もいらっしゃると思うと、作品は消えないのだと希望を持つことができます。

平成二十一年五月

宮本輝